



毎年のように日本に上陸し、大きな被害を及ぼす台風。その発生メカニズムや一生、予報の現場、被害などを分かりやすく解説した「台風の正体」(朝倉書店)が刊行された。著者の一人、横浜国大の筆保弘徳准教授(39)は言う。

「台風は複合的な被害をもたらす。人命だけではなく、経済的な損失も大きい」

日本で最悪の被害を出した台風は、半世紀ほど前の1959年に愛知、三重県などを襲った伊勢湾台風。死者・行方不明者は5098人に上った。

当時はメディアが発達しておらず、防災対応も不十分だったため、一つの台風で数千人単位の死者が出ることは珍しくなかった。その後、イン

「台風の正体」とは

横国大准教授ら書籍刊行

フラ整備が進んだことなどである程度は被害が抑えられるようになったものの、「今でも風水害で年間100人程度の犠牲者が出ている。大きな脅威であることに変わりはない、避難が難しい夜の台風は特に危険」という。

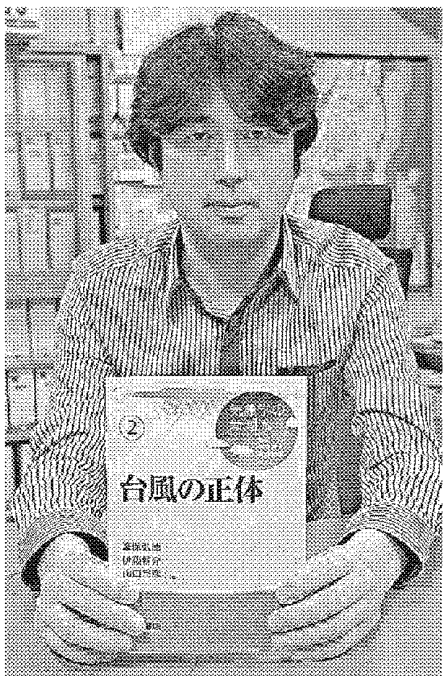
伊勢湾台風では高潮による湛水の影響が長期に及んだが、1917(大正6)年には東京湾でも「関東大水害」と呼ばれる深刻な高潮災害があった。「このときと同じような台風が運よく来ていないだけで、今後も高潮が起きないという保証はない」と筆保准教授は指摘する。

著書では、こうした被害の歴史や特徴のほか、「数字でみる台風」として上陸数の国別ランキング、都道府県別ランキングなども載せた。風速30メートル、50メートルの水の入ったペットボトルや傘をガラスにぶつける実験でボトルが割れたこと、ガラスが粉々になったことも記し、台風接近時は雨への警戒はもちろん、風への対策が欠かせないと説いた。

一方で「台風によって夏場の水不足が解消される地域もある」とも話す筆保准教授。そうした「横顔」もコラムで紹介している。

「台風の正体」は2900円(税別)。

(渡辺 渉)



若手研究者3人でまとめた書籍を手にする筆保准教授
|| 横浜国大